

## 茶道具と茶の湯

### 茶道

一般的に茶道、または茶の湯と呼ばれる日本の茶道は、粉状の緑茶を準備し、注ぎ、飲む一連の流れのことを指す。この芸道は、12 世紀から 14 世紀の間に中国から日本に伝わった。長年にわたって、この芸道は日本の厳格さやミニマリズムから成る美学と混ざり合うことで、日本茶道の独特な芸道が発展した。茶道（の流派）の多くは、現代茶道の父と考えられている千利休（1522-1591）によって 16 世紀に確立された。

茶道は、中国で天台仏教を学んでいた明菴栄西（1141-1215）が、お茶を薬としていた中国の文化を観察し、1191 年に日本に持ち帰ったと言われている。栄西は後に日本で禅宗の一派である臨済宗を確立し、まもなく鎌倉幕府（1185-1333）に採用（保護）された。1211 年、栄西はお茶を飲む利点を記した書物『喫茶養生記』を著し、当時の将軍であった源実朝（1192-1219）に献上した。この時から、お茶を飲む習慣が日本に定着したが、まだ後のように理論化され、儀式化された慣行にはなっていなかった。

鎌倉時代には、お茶はおもに薬として理解されていたが、徐々に社交と娯楽の基礎となっていく。鎌倉時代後期から始まり、上流階級の間で新しい形式の競争的な喫茶が出現し、凝った茶会が開かれるようになった。茶会に招待された人々は、例えば、10 杯、20 杯、または 100 杯といった多くの数のお茶のうち、どのお茶に梅尾（現在の京都府）の日本で最初の茶畑の「本物のお茶」が含まれているかどうかを当てるゲームを行った。これらのゲームは常に賭けが絡み、主催者は中国からの高価な茶道具を客人たちに見せびらかせるための費用を惜しまなかった。徐々に、これらの道具を観賞することが茶会の目的の一部になっていった。

お茶を飲む習慣は、この 2 世紀の間に武士の社会的娯楽となったが、千利休の影響によって体系化されたのは 16 世紀後半のことであった。1570 年、千利休は、戦国の世の統一のための戦いの真っ只中の織田信長（1534-1582）に初めて会って、お茶を出した。利久は信長に任命され彼の茶の顧問を務めた。利休は、信長の意志を引き継いだ豊臣秀吉（1537-1598）にも同じ役割で仕えた。この時期に、利休は、質素と不完全さを重視する日本的美学である「わび」「さび」の精神によって彼の茶道を洗練させていっ

た。

彦根城が建設される頃までには、茶道は武士階級にとって、非常に重要な文化的素養になっていき、藩の公式行事や社交の場では当然になっていった。第 13 代藩主の井伊直弼（1815～1860）は、茶道具を自分で設計・製作した茶道の達人であったことが知られている。井伊直弼は、江戸や彦根で茶会を何度も開催した。井伊家のコレクションには茶道具が 900 点以上もある。

### **茶道具**

井伊家の蒐集品の茶道具には水指、風炉、茶碗、茶筌、茶杓、棗、茶入がある。